

もできない日常が続いていたのである。

しかも、戦局は逐次悪化し、加えて、在支米軍の兵力は逐次増強され、都市部や、占領地区に対する空襲は日毎に増大し、我々は対支、対米、そして対地、対空の戦闘のため日夜警戒を厳重にせざるを得なくなつたのです。そして、斬り込み隊の編成が発表され、私や高橋軍曹の他、同年兵の坂田兵長等三十人は大岡塘を下し、中隊本部に帰隊したのである。

切り込み隊要員が中隊に戻ってみると、既に日本は全面降伏とのことであつた。予想もしない敗戦。こんなことでは何が起るか判らぬので、私は「銃は各人が抱いて寝る」「歩哨はどこどこに立てる」等と指示をする。そのためか、その夜は無事に明けたが、敗戦により、諸々のことが起こり、人の心や、軍紀の乱れなど、敗戦とは情けないものだと痛感した日々が続いた。

しかし、日本軍はやはり日本軍で、規律は再び戻り、全員が無事帰国する日が来たのである。

山上の分哨

東京都 佐藤 喜多郎

召集前は父母共健在で家業のパン・洋菓子の製造、卸を業としていた。九人兄弟の長男だったので学校を卒業するとすぐ手伝いをした。他の兄弟も学業を終えると手伝いやら見習奉公にでた。

あれこれする中、昭和十六（一九四一）年十二月八日、太平洋戦争が勃発した。

支那事変が（日中戦争）長引くのでこれを終結させるためと称されていたが、我々には真相は分からなかつた。それより米英相手の戦争で勝てるのかとの不安の方が大きかつた。

昭和十六年十二月二十三日、東部第十七部隊に入隊した。衛生隊で、世田谷区に兵営があつた。

富士山麓の瀧ヶ原練兵場で教育訓練を受け、そこで一期の検閲が行われた。

昭和十七年になると早々、極第二九一三部隊は、部隊を上げ、釜山―山海関―天津へと行動した。天津は北京に次ぐ北支第二の大都會であり、部隊は主として天津地区の警備に専念した。

私が属した大隊は、第一、第二、第三中隊と本部中隊に分かれていたが、輸送、補給が主たる軍務で、夜襲を受けたり、八路軍に襲撃されたこともほとんどない。

小さな討伐があると輸送隊を編成、第一線に武器、弾薬、食糧を補給するが、食糧が足らず現地調達することもあった。さすが北支は農産物の産地で何とか毎回、間に合った。治安状況もまあまあで、軍隊生活を通じて比較的平穏な時であった。

昭和十八年七月三十一日、極部隊（第二十七師団）は天津地区から満州への移駐を開始した。

部隊は関東軍の指揮下に入り、起伏果てのない大平原に、ほとんど休日のない訓練を開始、対戦

車戦闘、昼夜転倒訓練・行軍、駆足演習、耐寒訓練、非常呼集等々、想像を絶する演習が続けられた。

明けて昭和十九年二月十一日、非常呼集とともに河南作戦に参加することになった。北支最南端の清化鎮に至る。陽春の暖かさ樹々の芽生え、花の蕾等、満州との差に驚いた。

四月に入り大黄河を渡河、河南進攻作戦の火蓋が切って落された。日本軍四十万、敵約四十万の同数、河南の大平野に砲煙は流れ、銃弾は飛び、阿鼻叫喚の苦難は言語に絶した。

私の部隊は衛生兵と輸送兵が主体なので、第一線に出ることもなく、部隊の後続についてゆくだけなので第一線と自ら異なるが、それでも流れ弾が飛んできたりした。

五月五日、堰城を総攻撃し陥落させ、河南作戦は日本軍の勝利に終わった。そして漢口に約六師団集結、兵力を補強し装備を新たにし、次の湖南作戦の準備に入る。

嵐部隊は粵漢線に一路南下し広東州に入り、その周辺の討伐と治安にあたった。私も広東に南下中、湖南省の悠県で分哨勤務中に崖から転落して負傷し、本隊と別行動になるという事態が生じてしまった。

以下、その顛末記の一端である。

昭和十九年七月の暑い盛りである。連日の行軍でくたくたになり、中には居眠りしながら歩く者もある。馬を連れている部隊は、馬の尻尾にぶらさがりながら歩くという器用なこともでき、随分と助かった。

その夜の宿営地が決まり、私は部下十人と共に山の上で警戒分哨に立った。朝四時頃急に「部隊撤収引上げ」の命令が出た。小雨が一晩中降り続き霧も深い。一寸先も見えない状況だった。任務の際しつかり頭の中に叩き込んだ山道を滑りながら「気をつけろよ」と言いながら先頭に立って降り始めた。

「ハッ！」と息をする間もなく全身が地面に叩きつけられたように感じ、何もかもが分からなくなってしまった。「佐藤兵長殿！ 佐藤班長どの！」と遠くで呼ぶような声があるが、誰の声かはつきり分らない。その中部隊が移動の準備を始め出した。私は担架の上に寝かされていた。

一〇メートルの崖の上から鉄帽を背負ったまま落ちたそうである。仰向けに落ち、背中を強く打ったが幸い頭を打たなかったので助かった。下がクリークか断崖絶壁だったらこの世とおさらばだった。今、思い出しても冷や汗が出る。

背も動かせず全身打撲、従軍不可能の軍医の声で後送としまつてしまった。残念で泣くに泣けぬとはこのことだ。今は亡き粕谷一等兵と共に白川隊長に後送の申告をした。

隊と離れ離れになってからの後送は苦難と恐怖の連続だった。後送中は他部隊の兵と共同して食糧の徴発に務め、生き延びることを考えた。

兵の中には器用な者がいてポンカンで酢の物を

つくったり、蛙を塩漬けにして焼いたりして、結構料理らしきものを作ってくれた。

民間には虱がいっぱいいて、下着に卵を産みつけ、血を吸われて栄養失調になる兵も多かった。或る日、石油缶と釜を見付けたので、衣服を釜に入れ湯を沸かし木切れを燃やして蒸し殺した。これはみんなに喜ばれ、このために忙しい日を過ごしたこともあるが、二、三日経つとまた虱がわき、毎日虱との戦いだった。

野戦病院とは名ばかりで、傷病兵達が民家に板や藁を並べて寝るだけで、薬もなければ軍医も居らず衛生兵だけで、転々として後送の行軍また行軍で、民家を探しては泊まり、食物は自分達で調達し、武昌へ武昌への後送行軍であった。敵にはよく狙われ、我が隊を離れては情けない状態だった。

衡山付近で赤痢が大流行して同行の患者が一晩に五、六人位ずつバタバタと血便を流しながら死

んでいった。ここは諸島が多く、小さな諸だがいくらでも取れ、今までの空き腹に詰め込んだため殆ど下痢を起こして発病し、思い出してもぞっとするほど多数の兵士が亡くなっていった。

粕谷一等兵も明け方、藁布団の中で死んだ。「兵長殿、私はもう駄目です。この手拭を我孫子の家へ届けて下さい」と古呆けた手拭を預かった。

久しぶりで粥の給食が出た。水気の多い粥が飯盒の上蓋に半分ぐらいあったが、あつと言う間に蠅が真っ黒になってとまり、追い払い追い払いして啜った。

醴陵に近い宿営地に着いた時、我々は四、五十人位だったが敵に包囲されたとの情報が入り、発熱患者を除き、歩ける者は銃と手榴弾を持ち徹宵勤務にあたった。そこで小林君にも出会い、互いに励ましあった。「敵が来たら戦うだけさ」と豪語していたが、敵の来襲もなくホッとすると共に運が良かったのを喜びあった。

武昌近くの陸軍病院に来た時は白衣の看護婦もおりホツとした。我々の部屋には八人の患者がいて室長が私だった。婦長が毎朝点呼に来る。婦長は下士官待遇だからきびきびしていて恐いおぼさんだ。ここではよく「ガリパン」の原稿書きの使役に使われた。

私の右隣には栄養失調の寝たきりの一等兵と左隣は要領の良い精悍な上等兵がいた。その一等兵は、或る日寝たまま死んでいたのが婦長と私で点検したら、枕にしていた背囊の中から、私の紛失した煙草やら粉味噌が出て来たのには驚いた。元氣だった上等兵も急に具合が悪くなり、わけのわからぬ事を言つて突然部屋を飛び出し、鉄条網の上に駆け上がり、血だらけになって大声を上げて狂い出し「白い着物を着た頭に三角の白い布をつけた翁が追い駆けて来る」と譫言を一晚中言い続け、朝方に息を引き取った。他に五人もつぎつぎに死んでいった。皆栄養失調である。

武漢大学でやっと病院らしく薬も白衣も支給に

なった。この武漢大学は五階建ての立派な建物で敵機も空爆の目標から取り除いているようだった。病院で南京行きの船を待った。

昭和十九年末頃から戦況が悪化し、船舶は機銃掃射、機雷により次々に沈没していった。他に後送の道がなく沈没覚悟で後送船に乗船した。三百人位の傷病兵が乗船していたことと思う。船室は棚が二段に分かれ、上・中・下を三人寝るようになっていた。

本船の両端に小船を二艘並行させて、網で浮遊機雷を掃海しながら静かに進んだ。突然、夜中の一時頃「ドカン！」と大音響がして上から下に突き落されようなショックを受けた。棚のベッドが兵隊諸共下に筒抜けて灯が消え、何が何だか分からず、上段にいた私は咄嗟にデッキを跨いで甲板に上がり、ボートの側に駆け寄った。しかしボートは使用できず、みんなで松明をつけたが敵機に狙われ易いので火を消した。船が鉄板の為河底に

沈んでいる吸着機雷にやられたのだ。

船は「SOS」の警笛を鳴らしながら傾き始め、我々は上部に上がって沈没を防いだ。いつの間にか板切れを抱えていたことを思い出す。浸水が激しくなりどこもかしこも危なくなってきた。

付近の住民が一斉に小舟を出してくれ、我先にそれに飛び乗り助かった。

上陸したのは九江の陸軍病院だった。四〜五日シヨックで寝たきりだった。

船は三十分位で沈み、半数以上の患者は船と運命を共にした。傾きかけた甲板の上でもう駄目だと思つた時、暗い闇の中へ引きずり込まれるような思いをしたのが昨日のことに思い出される。

九江には極兵団に入隊する若い兵隊で湧きかえっていた。

数々の快復試験を突破し、若い兵の教育の面倒を見ていた。何と極兵団の本隊が粵漢線エツハンを北上し九江まできているのである。山の分哨で負傷以

来、二度と会えないと思つていた同年兵と再会できたのである。奇跡としか言いようがない。

数人の負傷の集団で本隊の後を追う心細さは味わった者でなければ到底理解できない心情である。

早速、原隊復帰の手続きをとる。

あにはからんや、八月十五日停戦の命を聞く。

正式には八月十八日、西山満寿宮で終戦の大詔を聞いた。

昭和二十一年三月十日、復員。上海より米軍L S艇で佐世保に向かった。